
石の涙

雪村星依子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

石の涙

【Nコード】

N6864M

【作者名】

雪村星依子

【あらすじ】

自然の要塞に守られる山腹の国に住まう美貌の瑠璃姫。外界では、彼女の所有権を巡って戦が続いていた。若き王・ミナ幕羅は力と知恵で瑠璃姫を手に入れる。父を殺され、しかし為す術無き姫は幕羅の妻となるが。戦禍の種となる姫と、世の安寧と姫の幸福を願う王の悲しい恋物語。

その美しい国は天に届く山岳の中腹、険しい山々が天然の要塞となつて外界との接触を一切許さぬ、そういう場所にあつた。大地の彼方あちこち此方に緑水晶の柱が植物のように生え、流れる水は翡翠色、大気中には常にダイヤモンドダストが舞っている。その国の中心には巨大な巻き貝状の城があり、全体瑠璃色であつたから瑠璃の巻き貝城と人々は呼んだ。

瑠璃の巻き貝城には国色の姫が居た。星夜の犇めく瞬きを閉じ込めたようにきらきらと艶やかな黒い髪を、陶器の如く真つ白で滑らかな肩に垂らし、ほっそりとしなやかな体を絹の衣に包む姿はこの世の者とは思えぬほど、見る者全ての目を眩ませる美しい輝きを常に放つていた。瑠璃の巻き貝城に暮らすので瑠璃姫と呼ばれる彼女の神々しいばかりの輝きは向けられた男の肉欲を蔽かに取り払い、また、彼女の国は険しい自然に固く守られていたことから、他国に侵されることもなく日々を穏やかに健やかに過ごしていた。

だが、幸せの日々はとうとう潰えてしまった。堅牢な守りで知られた瑠璃の巻き貝城は、近年飛ぶ鳥を落とす勢いで力を伸ばし、天下を平らげるのも間近と言われるほどの猛者・冪羅王の侵入を許してしまった。冪羅は頭が良く、難攻不落と言われた瑠璃の巻き貝城に攻め入ってから僅か七日のうちにあつさり陥落させてしまった。瑠璃の巻き貝城の人々は長らく争いを知らず山の加護に守られることにすっかり慣れていたから、いざ冪羅の侵入を許すと崩れるまではまるで赤子の首を縊るようにあつけなかった。冪羅は美しい国を軍靴で穢し、瑠璃姫の父王を殺害し、その血塗られた体で瑠璃色の玉座に座つた。瑠璃姫は冪羅を激しく憎んだが、父王を悼んで泣くことはなかった。泣けば光を失ってしまう。そうなつては仇である冪羅を殺せぬ。瑠璃姫はどんなに辛くどんなに悲しくても、決して涙を流そうとはしなかった。

瑠璃姫の操が危ないと幕羅が国に侵略してきた当初から囁かれていたことだが、今際になって瑠璃姫は抗おうとはしなかった。絶望は涙を誘う。涙は瑠璃姫から光を奪う。だから操は諦めることにした。自分は戦に負けたのだと、諦めてしまえば身を惜しむ気持ちもどうでもよく思えた。しかし幕羅を閨に迎えた折になって体ががたがたと震えだした。銀色の甲冑で身を隠す幕羅は実はひどく醜い男である、だから姿を隠すのだと侍女達が噂していた。さすがに甲冑姿で閨に訪れなかったが、あまりにも端正な顔立ちのスマートな男が現れたときは、まさかそれが幕羅だと瑠璃姫は思わなかった。切れ長の澄んだ瞳が印象的な美青年であった。しかし、相手がいくら優れた容姿の持ち主だからといって瑠璃姫が摩くはずもない。彼は父王を殺したのである。生前限らない愛情で瑠璃姫を守ってくれた優しい父を、その手で。瑠璃姫の中に憎悪の炎が揺らめくも、姫は決して外面に表すことはなかった。水晶の簾に守られた寝台の上に正座し、意思に反して小刻みに震える体を覚られぬように、身の内の恐怖の発露を抑えることに努める。幕羅が簾を上げて侵入してきたとき、瑠璃姫はきつと前を見据えた。

「気丈な娘であるな」

幕羅は瑠璃姫を、美術品を鑑賞するようなじつとりした目で見詰め、姫は粘つく視線に息苦しさを覚えた。姫の美しさは並の男の色欲を綺麗に吹き浚う力がある。しかし幕羅の眼差しはどの男よりも不躰で、瑠璃姫を我がものとすることに畏れも迷いもなく、ただ猛々しく漲っている。

「私を恨むか？　しかし、恨むのなら、自身の美貌を恨むことだな」
幕羅が、低いがよく通る声で囁いてきたとき、瑠璃姫はあまりの物言いに腹が立って言い返した。

「たかが一人の女を手に入れるために、人々を苦しめる。貴男は後世最も愚かな王として歴史に名を残すのでしょうかね」

幕羅は生意気な口をきく目の前の女に、怒るところか愉しむように冷笑をもらすと、

「随分大切に育てられたようだがな。その、たかが一人の女を巡って各地の王が我を競い、国を乱していることをそなたは知らぬようだ」

幕羅の言葉は瑠璃姫に大きな衝撃を与えた。自分の美貌が原因で男達が争い、世を乱し、大事な父王を殺す結果を招いた。その事実が姫の心を容赦なく抉り、傷を深く残した。

（私の所為、全て私の）

打ち拉がれる瑠璃姫を、幕羅は遠慮なく寝台に押し倒した。戯れもほどほどに体内に侵入してきた幕羅を、瑠璃姫は身と心を傷つけられた苦痛に必死に耐え、気を確かに保とうと奮い立ち、侮蔑の感情を双眸に込めて見上げる。

「貴男とて、他の王と変わらない。私を手に入れ、こうして玩んで愉しんでいるのだから」

嬌声の代わりに非難の声を浴びせられ、幕羅はくくつと笑った。

「そなたが原因で世が乱れるのなら、さっさとその原因を取り払えば事態は落ち着く。そしてそれは、最も力のある私が行う。そなたの父王ではそなたを守ることは出来なかった。その為の力と、知恵が無かったのだ。これからは私が守る。そうすれば世は平和になる」

まるで睦言のように甘く優しい声で耳朶に告げられ、瑠璃姫は困惑した。繋がったところから幕羅の真意が伝わってくるようで苦しかった。父を殺した男は世の乱れの収まることを願う義の人であった。彼は人を殺している。しかし、姫は血の流れる原因となっている。どちらが悪く、責めを負うべきか。姫にはもう判らなくなっていた。

幕羅が瑠璃姫を手に入れたことで事実上天下は平定された。しかし中にはしぶとく姫を欲する者がいて、強引に姫を奪った幕羅こそ悪の権化、姫を救い出した者が天下を統べる王たり得ると、上辺だけの正義を掲げて戦を続けた。幕羅のそれからの戦いは、そうした者をねじ伏せるために行われた。戦に行く前に幕羅は必ず瑠璃姫を

抱いた。冪羅の愛撫あいぶは初めての夜よりもずっと、壊れ物を扱うように丁寧であった。

「安心しろ。私が守る」

高まる熱に翻弄される瑠璃姫に冪羅は何度も囁いた。その頃の瑠璃姫にはもう冪羅を仇として討つという気は無くなっていた。夜毎優しく腕に抱かれ、不安を取り除く言葉を掛けられ、慈しまれている。瑠璃姫を心から守ろうとしていること、ひいては世界の安寧を願っていること、それらが本心であることを瑠璃姫は体を通して知って、抗いようもなかった。瑠璃姫は冪羅を愛していることに気が付いていた。だが、それでは父の無念を晴らせない。父を殺した男を愛し、その無念を身の内に封じ込めてしまおうとしている自分が許せず、瑠璃姫は冪羅に抱かれる間、とうとう抑えきれなくなつて涙を零した。冪羅は驚いて瑠璃姫の中に浸らせていた身を離し、すすり泣く姫の額をおろおろした様子で撫でた。姫の目元に輝くのは、なんと石であった。小粒だが、確かに宝石の輝きを宿すその石の雫を冪羅は手にとって凝視したが、何度見ても金剛石ダイヤモンドの粒である。

「瑠璃よ、これは何だ？」

冪羅が問うと、瑠璃姫は涙声で答えた。

「私の……涙です。私が涙を流すと、代わりに金剛の欠片かけらが零れるのです。目を傷つけるから、私はずっと泣くことを禁じてきました」
冪羅は腕を回し、子をあやす仕草で瑠璃姫の瘦せた背を優しく叩いた。決まったりリズムが瑠璃姫の昂ぶった気持ちをいくらか落ち着かせた。

「どうして泣いた？ 体が辛かったのだろうか」

冪羅が案じて問うてきたので、瑠璃姫は頭を振った。

「違います。貴男があまりにも優しく私を愛してくれて、私は貴男を憎みたいのに、でも心は貴男を好きだと言って偽らないのです。父に申し訳なくて、なのにもあまりにも幸せで、泣けてしまうのです」

瑠璃姫の言葉に、冪羅は初めて謝罪の意を口にした。

「すまなかった、すまなかった。私はそなたに殺されても、きっと

そなたを恨まぬ。そなたがそうしたいなら、そうしても構わない」

瑠璃姫は頭上から雷を受けたような衝撃を受ける。

「あなた、そんなことを言わないで。私には、もう貴男しかいないのです。貴男が好き、好きです。愛しているのです。ああ、貴男を殺すなんて酷いこと、今の私には出来るはずがない！　こんなにも貴男が愛おしく、慕わしく、狂おしいほど恋い焦がれているのに！」

「瑠璃、瑠璃よ……」

瑠璃姫と冪羅は思いを確認し合うように口づけして、再び体を重ね合った。

「冪羅様……　どうか無事に帰ってきて。父のことを記憶の彼方に押し遣る罪を負ってでも、私は貴男が好きでたまらないの。貴男の笑顔が、貴男の腕が、貴男の全てが愛おしいの。貴男が居なくなったら、私生きてゆけない」

「わかった、瑠璃。私は死なぬ。きっと生きてそなたの許に帰る。

大丈夫、私が強いのはそなたがよく知っていることだろう？」

冪羅は瑠璃姫の赤くなった目元にそっと指で触れる。金剛の涙が小さく煌めいた。

「美しいが、こんなにも痛々しい涙を、もうそなたに流させたくない。約束する、私はそなたをもう泣かせはしない」

「冪羅様」

幸福に包まれた夜は明け、黎明れいめいの中を冪羅は出陣した。瑠璃姫はその姿が見えなくなるまで見守っていた。

冪羅は、しかし約束を守れなかった。敵国と密通していた冪羅の参謀が、戦に紛れて冪羅を暗殺したのだった。報せを受けた瑠璃姫は、冪羅から後事を託された兵に逃亡を勧められるが、彼の遺体を見るまでは逃げられぬと、居城にてその帰還を待ち続けた。

居城に現れた敵国の王・馬喰ばくろによって返還された冪羅の遺体は、まるで眠っているだけのように綺麗で、姫はその体を労るよう抱き寄せ、冷たくなった頬に口づけを落とす。

「そのようなことをしても冪羅王は生き返らぬ」

馬喰の血も涙もない言葉が玉座の間に残酷に響く。しかし、瑠璃姫には冪羅との永の別れを惜しむばかり、馬喰の声などはなから届かない。

「いつまでやっておるのだ！ 儂を見よ！」

いつまでも自分を見ようとしないうちに苛立ち、馬喰は叫んだ。瑠璃姫は、しかし一度たりとも見てやらぬと言いたげに、冪羅の死に顔を見詰め続ける。

「冪羅様、冪羅様……。ごめんなさい、ごめんなさい。私の所為で死なせてしまった……。私の為に愛しい人が命を落としてゆく……。辛いわ、悲しいことだわ」

両目に熱いものが込み上がってくる。だけど、もう堪えることが辛かった。

馬喰は瑠璃姫の顎に剣先を突きつけ、強引にその顔を上げさせる。そしてあまりにも美しい瑠璃姫の容貌に、莊嚴な清らかさを放つ神がかった輝きに、馬喰は畏れを抱いた。しかし、世の安寧を願って瑠璃姫を手に入れた冪羅とは違い、馬喰の浅ましく下劣な欲は尽きるところを知らず、澱んだ邪気を全身の毛穴から放って姫の清浄な気を打ち消す。

「儂の妻になれ。冪羅を愛したように。そうすれば世界は丸く治まる」

馬喰は下卑た笑いを浮かべながら言った。馬喰の全体から滲み出る射干玉色のオーラは彼の醜い下心を表しており、瑠璃姫は全く彼を愛する気になれなかった。

「貴男が欲しいのは私の体でしょう。貴男は心の底から世の安寧を願っているのですか？ 私にはとてもそのようには見られません」

「冪羅とて同じだろう」

馬喰はその面に不快感を滲ませる。

「お前は戦禍の種だ。お前を巡って世界は争うことを止めぬ。お前が生きている限り戦乱の世は終わらぬ。誰がお前の伴侶になっても、

それは変わらぬのだ。取って代わりを繰り返すばかり、本当の平和など訪れぬ。ならば我こそは…と思うのは自然の道理だろう？」

瑠璃姫は、その通りかも知れないと思った。自分が生きている限り、争いは絶えない。でも、誰が伴侶に名乗りを上げても冪羅ほどの愛情深い男には今生会えまい。居たところで瑠璃姫は冪羅のように愛することはないと感じた。それほど冪羅を愛していたし、魂の失われた器だけの姿になっても冪羅が恋しいし、慕わしいのだ。

「冪羅様……、冪羅様……」

哀しみに暮れる瑠璃姫を、馬喰は兵に言って立ち上がらせる。しかし兵は瑠璃姫の顔を見て吃驚^{びっくり}してしまった。瑠璃姫の目から、金剛の欠片が止めどなく溢れ出ていた。

「泣きたいときに泣けないの……辛かった。だけど一番見たい笑顔はもう見られないもの。だから私泣くわ。目を傷つけて、光を失っても構わない。冪羅様の死を悼むわ。悲しむわ」

堰^{せき}を切ったように溢れ出る石の涙は零れる度に煌めき、シャラシヤラと音を立てて床に落ちる。さながら流星のようである。

瑠璃姫は泣いた。亡父の分も泣いた。冪羅のためにはもっと涙が流れた。しかし泣きじやくる瑠璃姫の瞳は金剛の角に傷つけられ、ついに赤い血を滲ませる。その血までも美しく凝固^{ひる}し、姫の頬には金剛と紅玉^{ルビー}の輝きが絶え間なく流れ、兵はすっかり怯^{ひる}んでしまった。それは馬喰ですら同じだった。瑠璃姫は冪羅の遺体から素早く短刀を抜き取ると、首筋に刃を立てた。

「瑠璃姫、何をやる気だ！」

気が付いた馬喰が制止するが、

「下がちなさい、馬喰王。私を欲しがるのなら、一時の時間を頂戴。冪羅様とのお別れの時間を」

瑠璃姫の意志の強さに、馬喰は折れた。一刻だけ、と言って馬喰は冪羅の居城から兵を退かせ、二人きりにさせてやった。

静謐さを取り戻した玉座の間に、石の涙の零れる音だけが微かに

響く。

「光も命も、もう要らないわ……。冪羅様への愛だけあればそれで……。ねえ……。だから私もゆくわ。そうしたらお迎えに来て下さる？ 貴男のゆく美しいところへ、私も連れて行って下さる？」

霞む視界に写る冪羅の横顔は、とても穏やかであった。今にも、迎えに行くよと言う声が聞こえそうであった。

「冪羅様……」

愛おしげに夫の名を呼んで頬笑むと、瑠璃姫は頤おとがいに刃を突き立てた。貫かれたところから鮮血が勢いよく飛び散るが、空気に触れた瞬間に凝血し、宝石となつて床に散乱する。瑠璃姫の体を伝つて流れ出た血は冪羅の亡骸なきがらを優しく濡らした。

一刻が経つて馬喰が戻ると、玉座の間に石の柱が立っていた。玉座の天井を色とりどりに飾るステンドグラスから光が射し込み、いくつもの面を持つ石に反射してそれは美しい輝きを放っている。石柱の傍らに冪羅の短剣があった。全体紅玉に包まれており、まさかそれが瑠璃姫の血であるとは思わず、馬喰は兵を挙げて城内を探させた。結局二人の姿は見つからず、馬喰は石柱の前で呆然と立ち尽くした。やっとそれが瑠璃姫の成れの果ての姿だと理解した。馬喰は惜しんで手を伸ばすが、石柱は彼を拒むようにピシッと亀裂の入る音を立て、次の瞬間、粉々に砕け散った。

（後書き）

キラキラしたものが好きなので、そうしたものを詰め込んでみました。石の涙を流す少女は実在するそうで、それをヒントに思いついたお話です。霧羅の名前は、屈原が身を投げたとされる汨羅江から拝借しました。

ご意見ご感想があれば、お気軽にお寄せいただけると嬉しいです。
メール：info.uranomemtria.mond.jp）
（@）

WEB拍手：http://clap.webclap.com
/clap.php?id=ginkembunko（1000文
字まで投稿可）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6864m/>

石の涙

2011年5月28日13時25分発行